見上潤： 調的か無調的か？さあ言ってみるがよい —シェーンベルク《架空庭園の書》作品 15 (1908-09)の分析—

“Tonal oder atonal ? Nun sagt einmal…” (Arnold Schönberg)

このシェーンベルク自身が作詩作曲したユーモラスなカノンで揶揄しているように、ある作品が「調性」(Tonalität)なのか「無調性」(Atonalität)なのかの客観的な判定は、そもそも「調性」や「無調性」の概念自体の精密な定義が確定していないがゆえに困難である。聴取レベルにおける「馴染みにくさ」、および分析レベルにおける古典的和声法の「適用しがたさ」から、何某かの「違い」を感受することが可能であるとはいえ、それでも明確なラインを引くことはできない。

一般に「無調性」で作曲したと言われているシェーンベルクやバルトークでさえも調性を放棄したという立場をとってはいない。おそらく、「調性」と「無調性」は対立概念ではなく、一個のスペクトラム(Spectrum)＝連続体として考えることが妥当ではないだろうか。

そのような前提に立つと、この一般に「調性」から「無調性」に移行したと言われている時代の作品群に何が生じたのかを具体的な作品分析を通じて明らかにすることは極めて重要であると言えよう。とりわけ、前回発表で提起した、多くの作曲家が怒涛のようにこぞって作風を転じた「白熱時代」と名付けた第 1 次世界大戦前夜にあたる 1908～1913 年のほぼ 6 年間の動向は注目に値する。

本発表は、まさにこの時代に作曲され、シェーンベルクの後期ロマン派スタイルの初期作品から、—後の作曲家に多大な影響をもたらすことになった—《月に憑かれたピエロ》作品 21(1921)とのミッシング・リンクに位置づけられる、《架空庭園の書》作品 15 を分析することによってこの時代の一断面を明らかにする。